

スワンプマンを抱きしめて

前田高弘

1. スワンプマンとは何であり、なぜそれが問題になるのか

まず、スワンプマンとは何であり、なぜそれが問題になるのかを改めて説明するところから話を始めたい。というのも、いまさらその説明は必要ないと思われる向きもあるかもしれないが、スワンプマン論法が正確にどのような立場を批判対象とするものであるかについての私の理解は必ずしも標準的とはいえないからである。

よく知られているように、スワンプマンは Davidson(1987)の架空のストーリーに登場するキャラクターである。すなわち、Davidson が沼のそばに立っている状況で雷が沼の腐木に落ち、その衝撃で Davidson の体が元素レベルにまで分解されるのと同時に、周囲に舞い上がった分子(Davidson の体を構成していたものとは別の)がまったく偶然に、分解される直前の Davidson の物理的に完全なレプリカを構成するような仕方で寄り集まってできたものがスワンプマンである。それは、Davidson の物理的に完全なレプリカであるから、もし雷が落ちずに Davidson が生きていたならば、彼が行なっていたであろう振る舞いとまったく同じように振る舞う(Davidson の友人に遭遇すればその人物と挨拶を交わすような振る舞いをする)と想像される。要するにそれは、その出自を別にすれば、本物のデイヴィドソンと物理的にはまったく見分けがつかない。

スワンプマン論法についての一つの標準的な理解によると、問題は、志向的な側面においてもそれは本物のデイヴィドソンと違いがないのかということになる。言い換えれば、志向性は志向的な存在者の内的な物理的状态にスーパーヴィーンするかということである。そして、志向性はその志向的な存在者が(系統などではなく)個体としてどのような環境と因果的に関わってきたかという歴史のあり方に依存すると考える立場によれば、その問いは否定的に答えられる。逆に、その問いは肯定的に答えられるべきであるとすれば、スワンプマン論法の批判対象の少なくとも一つは、その種の歴史主義であることになる。

しかし、私にはスワンプマンがその種の歴史主義を脅かすものであるとは思えない。実際、個体史の欠如のためにある種の志向性を欠くということは、それほど直観に反するものではないだろう(たとえば、現実に時空の特定の位置を占める自分以外の事物について考えることが可能であるとすると、その事物との何らかの因果的な関わりなしにそのことが可能であるというのは不可解である¹)。少なくとも、たとえその種の歴史主義が誤りであるとしても、スワンプマンの例によってその誤りを示すことはできないと考えられる。

いずれにせよ、私はその種の歴史主義の是非をここで論じるつもりはない。というのも、論じる価値のある問題がこのあたりにはないというわけではないが²、その問題は、以下で取り上げる問題ほどにはスワンプマンの例と密接に結びついているわけではないからである(桶の中の脳³の例などでも間に合う場合があるし、Davidson 自身は Putnam の双子地球のヴァリエーションとしてスワンプマンを持ち出している)。

¹ 自分自身についての思考(たとえば「私は今ここにいる」と考えること)については、この主張は当てはまらない。それゆえ、発生直後のスワンプマンでも志向性をまったく欠くわけではないということは、少なくとも直観的には否定されないだろう。

² Davidson(1987), Fodor(1994, pp.116-119), Adams & Aizawa(1997), Ludwig(1996), Levine(1996), Millikan(1996, §3)などを参照。

スワンプマン論法の標的として私がここで取り上げるのは、やはりある種の歴史主義であるが、個体史よりも(あるいは個体史だけでなく)個体の発生以前の歴史(系統史など)を重視するものである³。具体的には、任意のアイテムについて、それが何らかの固有の目的論的機能をもつかどうか(そして、もつ場合はどれをもつのか)は、そのアイテムの存在を説明する歴史的起源のあり方によって決まる(たとえば、心臓はその歴史的起源のゆえに血液循環を目的とする機能をもつ⁴)とする立場である。目的論的機能に関するそのような考え方は一般に起源論的理論(etiological theory)と呼ばれるが、その考え方をとりつつ、志向性を何らかの目的論的機能によって説明しようとするならば、志向性も目的論的機能を介して歴史に依存すると主張することになる。心の哲学では志向性に関するそのような立場を目的論的機能主義と呼ぶことが多いが⁵、スワンプマン論法の直接の標的は上述の起源論的理論であり、その射程は心の哲学に限定されるものではないことに注意する必要がある⁶。

この起源論的理論にまつわる問題がスワンプマンの例とより密接に結びついていることは、その例を少し変えて、成人ではなく誕生直後の Davidson の物理的に完全なレプリカとしてスワンプマン(スワンプベイビー?)が発生する状況を考えてみれば明らかである。そのスワンプマンは赤ん坊の Davidson の物理的に完全なレプリカであるから、桃太郎のように親切な里親にめぐり会えば、普通の赤ん坊と同じように成長するだろうと想像できる。この場合、個体史だけを要求する穏健な歴史主義によれば、それが普通の人間と同じように志向性を獲得することを否定する理由はないが、起源論的理論によれば、それ(あるいはその物理的構成要素)はいかなる目的論的機能も欠く(したがって、その理論に基づく目的論的機能主義によれば、それは志向性をまったく欠く)ことになる。つまり、起源論的理論は、穏健な歴史主義と違って、本質的にスワンプマンと摩擦を生じる可能性を秘めていることができる。

そこで、なぜ起源論的理論によれば、スワンプマンはいかなる目的論的機能も欠くことになるのかを正確に理解する必要がある。それは、単にスワンプマンが歴史を欠くからではない。むしろ、ある意味でそれも歴史(偶然に分子が寄り集まってできたこと)をもつといえるが、問題は、その歴史がそれ(ないしその物理的構成要素)の存在を合理的に説明する要素を欠いていることにある⁷。つまり、目的論的機能をもつには、その機能をもつアイテムがなぜ存在するのかについて、そのアイテムの歴史的起源が合理的な(その問題の機能

³ 以下で見るように、その歴史は進化史である必要はない。

⁴ ここで、機能をもつことは、機能を果たすことと区別されている。心臓は、その持ち主の健康状態を鼓動によって医者に知らせる機能を果たすことができるが、その機能をもつわけではない(その意味でそれは心臓の固有の機能ではない)。また、機能をもつことは、その機能を果たすことができることを含意しない(血液循環の機能を果たせない奇形的心臓でもその機能をもつとされる)。Wright(1973), Neander(1991a), Millikan(1989)などを参照。

⁵ Millikan に代表されるように、実際に展開されている目的論的機能主義の多くは起源論的理論にコミットしているが、本当にそれにコミットする必要があるのかについては議論の余地がある。だが、ここでそれを問う必要はない。

⁶ 水本(未刊)はスワンプマンを使って物理主義を攻撃する新奇な議論を展開しているが、そこでもやはり起源論的理論に基づく目的論的機能主義が前提されている。

⁷ ここで、存在することと、存在し続けることとを区別する必要がある。スワンプマンが存在し続ける能力をもつことについては合理的な説明が可能である。

の遂行に係る能力に本質的に言及する形の)説明を与えるものでなければならない。たとえば、時計らしき物体があなたの目の前にあるとして、それが普通の時計と同じように時を刻むことができるように見えても、もしそれがまったく偶然に各部分が寄り集まってできたものだとしたら、それが存在する理由について、時を刻む能力に係る合理的な説明を与えることはできないだろう。だが、もしそれが時を刻むことを目的として設計されたものだとしたら、まさにそのような説明を与えることができる。また、それゆえ、それは時を刻むことを目的とする機能をもつ(要するにそれは時計である)といえる。

この時計の例からわかるように、目的論的機能をもつアイテムは生物やその器官であるとは限らない。起源論的理論は生物学の哲学において論じられることが多いが、その本質的な論点は、生物学的現象を越えた一般性をもっている。もちろん、地球上の生命の創造者としての神(あるいは異星人)の存在を前提しない限り、生物の存在については、人工物の場合とは非常に異なる説明原理が求められる。そして、その説明原理は基本的に、自然選択による進化を設計的なプロセスに見立てたものである。それゆえ、生物やその器官の目的論的機能が依存する歴史は基本的に、自然選択による進化の歴史であると考えられる。実際、Millikan や Neander などの起源論的理論の代表的な主張者は、自然選択のような選択的なプロセスを目的論的機能の生成にとって不可欠の要素とみなしている (cf. Millikan 1993; Neander 1991b)。だが、確かに、創造者のいない世界において非常に複雑で合目的的なアイテムの存在がいかにも可能であることを説明するには、自然選択による進化に訴えることが不可欠であろうが(この点については次節でも触れる)、起源論的理論そのものにとってそれは不可欠ではないことに注意する必要がある⁸。その理論自体は、創造者のいない世界において目的論的機能がいかにも生成し得るかの説明を要求するものではないから、創造説とも両立するし、極端な話、我々の先祖がスワンプマンと同じような仕方でも発生したのだとしても、我々(ないし我々の体を構成する様々な器官)が目的論的機能をもつ可能性は排除されない(スワンプマンが偶然の産物であるのと同じ意味でその子孫は偶然の産物ではない)。したがって、起源論的理論にまつわる問題を進化論にまつわる問題と混同しないようにする必要がある。

以上で、スワンプマン論法の標的についての私の見解を提示し終えた。次の課題は、スワンプマン論法を評価することである。

2. スワンプマンの発生する可能性そのものを問題視することについて

起源論的理論にコミットする側からのスワンプマン論法に対する一つの典型的な応答は、スワンプマンがいかなる目的論的機能も欠くことになるという帰結を認めた上で、その帰結を擁護することである⁹。この種の応答は結局、スワンプマンは起源論的理論を脅かすものではないとみなすものであるが、次節で見るように、その考えは甘いと思はれる。だが、起源論的理論にコミットしつつ、スワンプマンを本物の脅威とみなすのであれば、可能な対処として私に思いつくのは、スワンプマンの例そのものを “ irrelevant ” なものとして排

⁸ 実際、自然選択を要求しない起源論的理論が Buller(1998)や Price(2001, pt.)によって展開されている(前者はさらに、自然選択を要求する起源論的理論を積極的に批判している)。

⁹ Dretske(1996), Millikan(1996), Neander(1996), Papineau(1996), deVries(1996)などがこれに該当する。

除することだけである¹⁰。実際、私はかつてそのような対応をしたことがあるが(前田 1999)、今の私には、それはまったく的外れであるように思える。しかし、そのかつての私の議論について、水本(未刊)における私への批判¹¹に対する回答も兼ねつつ、ここで振り返っておくことは無駄ではないだろう。

前節で見たように、起源論的理論に基づく目的論的機能主義によれば、スワンプマンは志向性を欠くことになるが、その上さらにクオリアを志向的な性質とみなすならば、スワンプマンはクオリアをも欠くことになる。だが、物理的に普通の人間と本質的に異なるところのないスワンプマンが適切な歴史を欠くというだけでクオリアを欠くというのは直観に反する¹²。それゆえ、クオリアも目的論的機能を介して歴史に依存するとみなす立場をとりながら¹³、スワンプマンがクオリアを欠くことを認めたくなければ、可能なほとんど唯一の方策は、その立場に対するスワンプマンの例の関連性そのものを否定することであるように思われる。そのような問題意識に基づいて、スワンプマンの発生する可能性そのものを問題視するという方法を追求したのが前田(1999)である。

改めてここで注意しておくが、そこで問題視されているのはスワンプマンの発生する可能性であって、スワンプマンがクオリアをもつ可能性ではない。これは前田(2001)でも注意したことだが、水本には相変わらず理解されていないようである。前田(1999)の議論を水本(2000)は、

(P1) $\sim \diamond$ (スワンプマンはクオリアをもつ)

を

(P1') $\sim \diamond_x (Sx \supset Qx)$

として(Sx : x はスワンプマンである¹⁴, Qx : x はクオリアをもつ)

(P2) $\sim \diamond_x Sx$

¹⁰ ある種の起源論的理論にコミットする Dennett(1996)は、スワンプマンを脅威とはみなしてはいないが(むしろ軽侮している)、戦略的にはこの方向を追求しているといえる。

¹¹ これは、前田(1999)に対する水本(2000)の批判についての前田(2001)のコメントに対するものである。

¹² 特定の時空的事物についての思考などとは違って、クオリアは常に「今ここにある(here-and-now)物理的条件のみによって実現される性質」であるように思われることが、その直観を部分的に支えていると考えられる。また、スワンプマンにクオリアを認めないことは、その当の立場にとっても自己論駁的であるといえる。すなわち、その立場が重視する歴史は基本的に自然選択による進化史であるが、自然選択が作用しかつ産出し得るのは物理的な事物だけであり、物理的な事物としてスワンプマンと人間が本質的に異なるところのない以上、前者がクオリアを欠くということは、クオリアが自然選択によって生み出されるものとは何か別のものであることを示唆する(少なくとも、クオリアの生成にとってなぜ自然選択のプロセスが必要であるのかをなぞにする)といえる。(実際私にはむしろ自然選択のほうがクオリアに依存するよう思えるが、そうすると問題のその立場は誤りであることになる。) ちなみに水本(未刊)は、スワンプマンにクオリアを認めることこそその立場にとって自己論駁的であると述べているが、彼は間違っているように思われる。スワンプマンがクオリアをもつことを認めれば、クオリアは進化史において因果的役割を果たしてこなかったことになると彼は言うが、たとえばスワンプマンが心臓をもつことを認めても、人間の心臓が進化史において因果的役割を果たしてこなかったことにはならないはずである。

¹³ 今ではその立場に対して私は懐疑的になっている(起源論的理論そのものに対する懐疑とは別の理由で、cf. 前田(未刊))。また、目的論的機能主義に対して好意的な Neander(1996, p.125)や Sober(1985, § 4)なども、クオリアの本性が目的論的機能によって捉えられるとは考えていないようである(Millikan(1984, p.93)もスワンプマンが少なくとも意識をもつことを否定しないように見える)。さらに、その立場を代表する Dretske 自身の見解も最近変化してきている(cf. Dretske 2001)。

¹⁴ ここで「スワンプマン」は、Davidson の物理的レプリカではなく、任意の人物の偶然に発生した物理的レプリカを指す一般名辞として使われている。

から導こうとするものであると解釈しているが、前田(2001)でも述べたように、私はそもそも P1 を主張していない。しかし、水本(未刊)はこの私の抗議に首を傾げている。彼によると、クオリアをもつスワンプマンの存在 ($\neg x(Sx \supset Qx)$)は目的論的機能主義に基づく表象主義にとっての反証となるからこそ、その可能性を否定するために私はスワンプマンそのものの可能性を否定しようとしたとのことである。だが私は、すべての可能世界においてスワンプマンは存在しないなどとは主張していない(だから私は P2 も主張していない¹⁵)。私が否定しようとしたのは、我々の世界と自然法則を共有する世界においてスワンプマンが存在する可能性である。つまり、スワンプマンがこの世界の自然法則の下で不可能な存在者である限り、自然主義(ないし物理主義)を奉じる者にとってそれは理論的な価値をもたない、ということをお前は言いたかったのである。

そもそも、「スワンプマンはクオリアをもつ($\neg x(Sx \supset Qx)$)」という命題はスワンプマンの存在に関して中立である(クオリアを欠くスワンプマンの存在だけが否定されている)から、その命題を肯定することと、スワンプマンの存在を否定することは矛盾しない。だが P1 のように、その命題は必然的に偽であると主張することは、クオリアを欠くスワンプマンの必然的存在を主張することに等しい。これは明らかに変であると私は前田(2001)で述べたが、水本はこのことをなぜか、P1 の解釈として私の($\sim \Diamond x(Sx \supset Qx)$)ではなく彼の(P1')が正しかったことを示すものとして捉えている。なぜそう捉えられるのか私には理解できないが、少なくとも初歩的な論理的観点から見れば、「クオリアをもつスワンプマンが存在する」という命題は「スワンプマンはクオリアをもつ」という命題の十分条件ですらない、ということは確かである¹⁶。

さて、水本(未刊)における私への批判の部分を読めると、彼がもう一つ重大な誤解をしていることに気が付く。すなわち彼によると、前田(1999)の議論は、スワンプマンの形而上学的不可能性を言うために、スワンプマンの想像不可能性を示す形になっているとのことだが、これは誤解である。彼が引用しているように、私は確かに次のように述べた。

[...]スワンプマンが出現するような世界がいかに我々の現実世界からかけ離れているかを示すことにより、スワンプマンの形而上学的可能性を疑わしくさせ、結果的にスワンプマンが想像可能ではなくなるようにすること、これが私の戦略である。(前田 1999, p.71)

この文章だけを読むと、スワンプマンの想像不可能性を確立することが私にとって重要な

¹⁵ 前田(2001)においてこのことを明示的に述べておけば、あるいは誤解を防げたかもしれない。

¹⁶ P1'は結局、「必然的にスワンプマンはクオリアをもたない($\neg \Box x(Sx \supset Qx)$)」という命題と同値であり、一見 P1 に等しいように見えるかもしれないが、P1 をストレートに解釈すれば、P1 が述べていることは「スワンプマンはクオリアをもつ」という命題が真となることはありえないということであり、P1 と P1'はまったく別の命題である(P2 が真のとき、P1'は真となるのに対して、P1 は偽となる)。

ちなみに前田(2001)では、P2 から P1 への論証がそもそも形式的に妥当でないとして、P1 を、 $(P1'') \quad \neg \Box x(Sx \supset \Diamond Qx)$

に置き換えることを提案したが、水本は、P1''はクオリアをもつスワンプマンが他の世界に存在することを排除しないから不十分であると述べている。だが、何度も言うように、クオリアをもつスワンプマンが他の世界に存在することを私は否定していない。また、私に言わせれば、P1''は P1 ほどではないにせよ、やはりばかげている。

目標であるかのような印象を受けても不思議ではないが、全体の文脈をきちんと押さえれば、私の目標はあくまでスワンプマンの形而上学的不可能性を確立することであるのは明らかにはずである。実際、想像可能性自体は大して重要ではなく、それはあくまで形而上学的可能性を判断する一つの基準として重要であるに過ぎない(また、上の引用文のすぐ後に続く箇所でも述べているが、想像可能性のほうが形而上学的可能性に従うこともありうる)¹⁷。

私がスワンプマンの想像可能性を問題にしたのも、スワンプマンの発生が少なくとも論理的な矛盾を含んでいないという意味で想像可能であり、スワンプマンが想像可能であることはスワンプマンの形而上学的可能性を否定する者に対して一定の拳証責任を負わせる、と考えたからである。そこで私は、スワンプマンの発生が自然主義者にとって興味深い意味で形而上学的に可能であるためには、この世界の自然法則がその事象の生起を許容するものでなければならないと主張した。もしその主張が正しいとすると、スワンプマンが想像可能であることは、その想像が自然法則的な制約を考慮しない自由気ままな視覚的イメージや単なる論理的な思考可能性などに依拠している限りにおいて、スワンプマンが自然主義的に重要な意味で形而上学的に可能であることを保証するものではないことになる。そして、自然法則的な制約を考慮した場合にスワンプマンが想像可能であるというのは決して自明ではない。

だがそこで問題となるのは、実際にこの世界の自然法則はスワンプマンのような存在を許容するものであるのか、ということである。許容しないというのが私の直観だが、直観に訴えない直接的な証拠のようなものを提示することはできない(そもそもそれが可能であるとも思えない)¹⁸。代わりにできることは「状況証拠」を提示することだけだが、それについて私は、創造者のいない世界においてスワンプマンのように高度に複雑で合目的な構造をもつものがダーウィンのプロセスなしで偶然に発生する確率はばかばかしいほどに小さなものであること¹⁹、また実際問題としてそのような事象が現実的に起こり得るとは信じられていないこと(だからこそ「デザインからの論証」が説得力をもつ)²⁰、さらに我々自身がダーウィンのプロセスの産物であることを示すように見える経験的データが存在することなどを指摘しておいた。スワンプマンの発生が極めてありそうにないということは誰もが認めるだろうが、それらの事実は、その「ありそうなさ」が、実際にそれが不可能であることに根差していることを示すように思われる²¹。

もちろん、所詮は状況証拠に過ぎないから、直観を共有しない者に対しては私の議論は

¹⁷ したがって、私は水本(未刊)の「テーゼ MM(前田=水本)」、すなわちもしスワンプマンの発生が想像可能ならば物理主義は偽であるというテーゼを主張するつもりはない。主張したければ一人でどうぞ。

¹⁸ 水本(未刊)は、スワンプマンの不可能性について直観に訴えない積極的な「証拠」を提示できなければ、拳証責任のある側の負けであろうと述べている。私はそうは思わないが、ここで勝ち負けにこだわるつもりはない。ここでは、私の以前の立場を確認し、それを正しく批判することを狙いとしている。

¹⁹ このことは Neander(1996, pp.124f.)においても指摘されている。(ちなみに、私が前田(1999)を書いた時点では、*Mind & Language* のスワンプマン特集号は未見であった。)

²⁰ 我々の認識的性向には世界の因果的構造を(系統史と個体史の双方における適応的学習を通して)反映する側面があることがここで想定されている。

²¹ Neander(ibid.)は、高度に複雑な有機的システムが自然選択によって創造されることは現実世界とその近傍のすべての法則的に可能な世界についての極めて深い事実であると述べているが、私は彼女とスピリッ

説得力をもたないだろう。(私の議論は、その直観を共有しながら、想像可能性の誤用によって反対の直観へ誘導されているような人に対して説得的であることを意図している。) 実際水本(未刊)は、私の議論が結局直観に訴えるものであることを批判している。彼によると、我々が前提しているのは、スワンプマンの可能性を否定するようなものは見当たらない、というネガティブな根拠だけであるから、私は直観に訴えない積極的な証拠を提示する必要があるらしい。だが、私に言わせればむしろ、スワンプマンの不可能性を積極的に否定するようなものこそ見当たらないのである(だから私は彼の言う「我々」の中には含まれていない²²⁾²³。

いずれにせよ、私は前田(1999)の議論が水本の批判によって決定的に反駁されるとは考えていない。だが、その議論は問題の本質を見過している点で根本的に誤っていると今では考えている(その点で恐らく水本も同罪である²⁴)。スワンプマンの可能性に関する水本との論争がまったく無益であるとは思わないが(実際彼のおかげで自分が何を主張しているのかをよりよく理解できた)、そもそもスワンプマンの可能性はスワンプマンが提起する問

トを共有しているようである。

²² ただし、スワンプマンの可能性を論理的に否定するものは見当たらないということは私も認める。

²³ 直観について水本(未刊)はさらに次のように述べている。

相対性理論や量子力学も、著しく我々の直観に反する側面がある。だがそれらが認められてきたのは、経験的一般化として理論が構築されてきたからであり、直観に反する部分が少々帰結しても、全体としての理論がデータと合致しているからである。同様に、目的論的機能主義の観点から見れば、それがデータから導き出される(生物学的)機能についての最も自然な理論である以上、今まさに直観が覆されようとしている、と主張する権利があるはずである(この文脈におけるデータとは、我々が知る限りの生命と生物学的機能は全て進化の産物である、という経験的事実である)。[下線引用者]

下線部の「それ」が何を指すのか明確でないが、それ以上に不可解なのは、そこで言及されているデータに関して、スワンプマンの可能性を示すようなものがまったく見当たらないことである。むしろそのデータはスワンプマンの不可能性にとって有利であると解するほうが自然であろう。

ところで、スワンプマンは法則的に不可能であるという直観を抱く者は私だけでないことは確かであるように思われる。注 21 で言及した Neander 以外に、たとえば Dennett(1996)なども、スワンプマンなどが法則的に可能でなくても論理的に可能であることを重視する考え方を批判しているところから、その直観を共有しているように見える。また一般に、「デザインからの論証」を説得的に感じるような人などにもその直観は共有されているだろう。だが、その点に関して、物理学者と非物理学者(生物学者なども含む)とは異なる可能性がある(cf. Millikan 1996, § 4)。たとえば Dennett(ibid.)は、悪魔が微笑みかけるだけで室温の水を凍らせてしまう可能性について、ばかげていて考慮に値しないと述べているが、物理学者はそれをまじめに考慮する可能性がある(Dennett は言及していないが、その例は本質的にマックスウェルの悪魔に等しい)。というのも、微視的なレベルの物理現象は時間的に対称であるのに対し、熱力学の第二法則が示すように、巨視的なレベルでは多くの物理現象が時間的に非対称であるように見えるのは、物理学者にとっては一つのパラドクスだからである。実際、水本(未刊)は Millikan(ibid.)を引き合いに出しつつそのような物理学的観点から、もし人間を一瞬のうちに分子レベルまで粉々に分解できるなら、その逆の事態も原理的には可能であると述べている(Millikan 自身は、スワンプマンが物理的に可能であるというのはそれほど自明ではないと言おうとしているようだが)。しかし注意されたいのは、スワンプマンは、人間が分解された状態から時間的に逆行するような形で偶然に発生するのではなく、あらかじめ人間が存在していたことにまったく依存しない形で偶然に発生すると想定されていることである。果たして物理学者がそのような意味でのスワンプマンの可能性を認めるかどうか私には定かではない。だが、これは前田(2001, n.11)でも触れたことだが、そもそもスワンプマンの物理的不可能性にこだわる必要はないのかもしれない。確かに、物理学的に不可能なことは生物学的にも不可能であるが、物理学的に可能なことは生物学的にも可能であるとは限らない。そして、自然主義的に動機付けられている目的論的機能主義が依拠するのは基本的に進化生物学である以上、進化生物学の範囲を越えた可能性を問題にする必要はないと主張することは、前田(1999)における問題意識にとって十分であるように見える。

²⁴ 同様に Dennett など間違っている。

問題の本質とは関係がない。問題の本質はスワンプマンそのものではなく、現実に存在する我々(及びその他の生物、あるいは一般に目的論的機能をもつとされるもの)に関係している。つまり、我々のもつ生物学的性質や志向的性質の形而上学的身分は本当に、起源論的理論やそれに基づく目的論的機能主義が主張するような仕方では歴史に依存しているのかが問題であり、スワンプマンの例はその問題を鮮明な形で提起するための道具に過ぎない。それゆえ、たとえスワンプマンが実現不可能であるとしても、それが提起する問題が本物でないことにはならない。言い換えれば、たとえスワンプマンにさよならできても、それが提起する問題にさよならできたことにはならないのである。

実際、次節で見るように、その問題は本物であると私は考えているが、その問題を提起するのにスワンプマンを持ち出す必要はない(その意味でもスワンプマンの可能性はその問題にとって本質的ではない)ということはこの中で強調しておく価値があるだろう。二つ例を挙げておきたい。一つは実際に存在するものであり、それはミュータント(突然変異体)である。進化生物学によれば、適応的に有利なミュータントはまったく偶然に発生するが(それでもその蓋然性の高さはスワンプマンとは比べ物にならない)、その適応的に有利な形質のためにより多くの子孫(コピー)を残す確率は高い。この場合、起源論的理論によると、ミュータントとそのコピーは、その適応的に有利な形質に関して物理的にまったく異なるところがないとしても、後者の形質だけが目的論的機能をもつことになる。このことは、スワンプマンが提起するのと本質的に同じ問題を提起すると考えられる。

もう一つの例は、発生の仕方が偶然であることは問題の本質に関係がないことを示すものである。たとえば、どんな機械や道具でもその完璧なコピーを作ってしまう職人(ロボットなどでもよい)が、今日の前にある得体の知れない装置のコピーを作ろうとしている、という状況を想像してみよう。その装置は知的生命体によって作られたことを窺わせるほどに複雑な構造を備えているが、一体何のための装置であるのか(そもそも目的があるのか)はさっぱりわからない。それでもその職人はその装置の物理的に完璧なコピーを作り上げる。さて、この場合、そのコピーはスワンプマンのように偶然に発生するわけではないが、起源論的理論によると、たとえそのオリジナルが何らかの目的論的機能をもつとしても、そのコピーは何の目的論的機能ももたないことになる。というのも、そのコピーの存在について、そのオリジナルのもつ目的論的機能(ないしその機能の遂行)に本質的に言及する形の合理的な説明が存在しないからである。それゆえこの場合も、目的論的機能をもつものとの物理的同一性が目的論的機能をもつことを保証しないという点で、スワンプマンが提起するのと本質的に同じ問題を提起すると考えられる。

3. 目的論的機能はそれほど重要か？

いわゆる哲学的ゾンビの話に馴染んでいる人にとっては、クオリアを欠くスワンプマンはゾンビの一種であり、ゾンビの可能性が直観に反するのと同じ程度にクオリアを欠くスワンプマンの話も直観に反する(逆にゾンビの可能性が受け入れられる人にはスワンプマンの話も受け入れられる)、と思われるかもしれない。しかし、起源論的理論は、志向性やクオリアに関する特定の理論に加担しなくても、スワンプマンに関してゾンビの可能性に勝るとも劣らぬほどの直観に反する帰結をもつ。というのも、その理論によると、スワンプマンは人間がもつ生物学的器官をすべて欠くことになるからである。たとえばスワンプマ

ンの内部にある人間の心臓によく似た物体は、適切な歴史を欠くために何の目的論的機能ももたないことになり、したがってそれは心臓ではないことになる(病気や奇形などのために何の機能も果たせない心臓というものはありうるが、何の機能ももたない心臓というものはない)²⁵。だが、単に適切な歴史を欠くというだけでスワンプマンが心臓などをもたないというのは確かに直観に反するよう見える。たとえば仮に、心臓移植を必要とする患者がいて、適合するドナーがたまたまスワンプマンであったとしたら(交通事故に遭って「脳」死状態に陥ったとしよう²⁶)、他の理由が何であれ、スワンプマンの出自を根拠に「心臓」移植を拒むのは愚かなことであろう²⁷。しかし、起源論的理論の立場をとる人々は、たとえ「心臓」移植を拒むことはなくても、あくまでスワンプマンの「心臓」を人間の心臓と同列に扱うことを拒否するのである。私にはそれは不合理な態度であるように思われる。

もちろん、不合理であるように見える帰結をもつことは、必ずしもその理論が誤りであることを示すわけではない。正しい理論が日常的な直観に反する帰結をもつことは十分にありうる。要は、その理論が対象とする現象を十分に説明できているかどうかである。それゆえスワンプマンの例も、起源論的理論を疑う理由は与えても、それ自体はその理論を決定的に反駁するものではない(cf. Neander 1996)。

では、その理論はどのような現象を説明対象としているのだろうか。私の理解では、それは生物学的な事物などがもつとされる規範的な特徴を説明対象としている。たとえば心臓などは、それが実際に行うこと(あるいは行う傾向をもつこと)によってではなく、それが行うべきことによってしばしば特徴付けられる。しかも、その場合の「べき」は「できる」などとは厳密に区別される²⁸。つまり、血液循環の機能を果たせない奇形の心臓などは、その機能をもたないのではなく、その機能を果たし損ねているものとして捉えられる。そして、その意味での規範的な特徴は、問題の事物のもつ物理的構造や、統計的な意味での標準性などによっては捉えられないとされる。すなわち、奇形の心臓などは血液循環の機能を果たすのに適した物理的構造を備えていないし、仮に伝染病などで人類のほとんどが心不全を患うようになったとしても、そのことによって人間の心臓の機能が変化するわけではない。だがそうすると、その種の規範性は一体何に由来するのかが問題となる。起源論的理論とは要するに、その問いに対して、問題の事物の存在を目的論的に説明するような歴史に訴えることによって答えようとするものであるといえる。

したがって、その理論において目的論的機能は、いわゆる Cummins 的な機能(Cummins

²⁵ 実際 Millikan(1984, p.93)などははっきりと、スワンプマンのような存在者は心臓などのあらゆる臓器を欠くと述べている。また、心臓であるための要件として、血液循環の機能を果たすことができるだけで十分だ(必要ではないが)とすると、目的論的機能は心臓の本質的な特性ではないことになり、それだけ形而上学的には興味を引くものではないことになる。(だが、私はまさにそのことをこの節で主張しようとしている。)

²⁶ スワンプマンがもつ人間の臓器によく似た(物理的には本質的な違いがない)物体の名前を括弧付きで表記することにする。なお、「脳」死状態であるかどうかに関係なくスワンプマンから「心臓」を摘出して倫理的に問題はない、という主張が起源論的理論から帰結するよう思われるが(そのことも起源論的理論の問題点の一つに数えることができる)、ここではその点を追及するつもりはない。(その点に関する議論が Papineau(2001, pp.282ff.)に見られる。)

²⁷ これとよく似た論点が Braddon-Mitchell & Jackson(1997, § V)にも見られる。

²⁸ 注4を参照。

1975)などとは厳密に区別される。Cummins 的な機能(以下 C-機能)とは要するに、問題の事物が属する階層的なシステムにおいてその事物が果たす役割(システム全体の振る舞いや能力に対する寄与)のことである。そこで、問題の事物がどのシステムに属するかは、どのシステムの振る舞いや能力が説明的関心の対象になっているかによって決まる。つまり、同一の事物でも説明的関心の違いによって異なる C-機能をもちうる。たとえば、同一の心臓でも、循環器系では血液を循環させるという C-機能をもち、医療システムでは患者の健康状態を医者に知らせるといふ C-機能をもつことがありうる。ただここで重要な点は、C-機能には規範的な要素がまったくないということである。というのも、ある特定の説明的観点において何らかの体系的な役割を果たさないものは端的に C-機能を欠くことになるからである。

すると結局、スワンプマンの「心臓」などはせいぜい C-機能をもつことはあっても、目的論的機能をもつことはないということになる。なぜなら、スワンプマンの「心臓」などが何らかの機能を果たし損ねるといふ事態を可能にする規範的な要素がそこには見当たらないからである²⁹。またそれゆえ、「心臓」移植を受け入れながら、スワンプマンの「心臓」を人間の心臓と区別することなども不合理な態度ではないということになる(その理屈によると、「心臓」は移植されることによって心臓になる)。起源論的理論の立場をとる人々の言い分とは、要するにそのようなものであろう。

私もかつてはその立場に魅力を感じていたが、今ではすっかり色褪せて見える。その理由の一つは、そもそもその理論が問題の規範性を本当に説明できているのかどうか疑わしいということである(cf. Davies 2001, ch.7)。だが、その点については問わないでおこう。ここでは、仮にその立場の言い分を認めたとしても、スワンプマンの例は「目的論的機能」の概念が形而上学的には大した意義をもたないことを示唆している、ということを描きおきたい。

その立場の根本的な問題点の一つは、目的論的機能の規範的な側面を重視するあまりにその物理的な基盤を軽視していることである。たとえば Millikan(1989)は、スワンプマンのような存在者が目的論的機能をもたないことについて、黄鉄鉱(fool's gold)や XYZ がそれぞれ金や水でないことと同列に扱いながら説明している。つまり、事物の外見は問題の性質がそこにあるかどうかを知らせる一つの基準であるが、その当の性質を構成するものではないということである。だが、黄鉄鉱や XYZ はそれぞれ金や水と物理的に異なるのに対し、スワンプマンは通常の人間と物理的に異なるわけではない。むしろ、目的論的機能に関して「本物」と「偽者」の区別が物理的な違いに依拠しないということは、その形而上学的身分が金や水などの自然種とは本質的に異なっていることを示している³⁰。そして、スワンプマンが何の目的論的機能ももたないとすると、スワンプマンと我々の間には物理的に本質的な違いがない以上、我々がもつとされる目的論的機能も実は単なる名目的なものに過ぎず(物理的にまったく同じでも製造元が違うだけで本物と偽物が区別される貨幣やブランドのように)、したがってそれは形而上学的には空虚なものであるように思われる。つ

²⁹ これは実際 Dretske(1996)、Millikan(1996)、Neander(1996)などに共通に見られる論点である。

³⁰ 実際 Millikan(1996, § 2)は、一般の自然種とは区別される実在種(real kind)ないし歴史的種(historical kind)のようなものを指している。

まり、目的論的機能は実在的なものではなく、説明的関心などから我々によって事物に投影されたものに過ぎないのではないかという疑念を禁じ得ない。(あるいは、起源論的理論は「理論」というより一つの「見方」を提供するものであると考えられる³¹.)

そもそもなぜ目的論的機能というものをもち出す必要があるのかをよくよく考えてみると、そこには確かに専ら説明的ないし認識的な理由しかない(その理由において目的論的機能を実在的なものとして措定する必要がない)ように思われる。たとえば Papineau(2001, §)は、目的論的機能主義の意義を説明する文脈で、デザインに関する歴史を知ることは問題の事物の振り舞いや働きなどをよりよく理解することに寄与し得る(とりわけその事物の因果的能力に関する知識が断片的である場合に)、ということ述べているが、そのことは形而上学的な意義を示すものではない³²。実際 Matthen(1997)に言わせると、生物学などでよく見られる目的論的説明においてしばしば用いられる「デザイン」などの言葉は単なる比喩以上のものではなく、その比喩としての役割は、問題になっている事物の特徴とその当の事物の存在との間に重要な因果連関(それ自体は目的論的な要素を含まない)が存在することを示唆することであり(そうすることによってその因果連関を追究するリサーチ・プログラムを方向付ける)、当の目的論的説明自体は生物学などにとって不可欠であるわけではない。スワンプマンの例などを考えると、私にはこの Matthen の主張がいっそう説得力をもつように感じられる。

4. おわりに

このように、スワンプマンについての私の考えは前田(1999)とはまったく正反対の方向に変化してきているが、起源論的理論とスワンプマンは本質的に調和しないという直観だけは私の中で一貫している。実際、前田(1999)のように、起源論的理論にコミットする立場からスワンプマンの問題に対処しようとするれば、たとえ的外れでも、スワンプマンそのものをその立場には無関係なものとして排除する以外に方法がないように思われる(その意味でその対処の仕方は「正しい」ともいえる)。だが、スワンプマンの例が提起する本質的な問題にいったん気付いてしまえば、起源論的理論そのものを見直さざるを得ず、結局スワンプマンにさよならするような論文は書けないだろう。しかし、今や私はその問題に気付いている。その結果として、ここでは逆に起源論的理論にさよならするような論文を書くはめになってしまった。だがもちろん、そのことによって問題の真相に近づくことができたのであれば、何も悔いることはない。

文献

- Adams, F. & K. Aizawa, 1997, Rock Beats Scissors: Historicalism Fights Back, *Analysis* 57, 273-281.
- Braddon-Mitchell, D. & F. Jackson, 1997, The Teleological Theory of Content, *Australasian Journal of Philosophy* 75, 474-489.
- Braddon-Mitchell, D. & F. Jackson, 2002, A Pyrrhic Victory for Teleonomy, *Australasian Journal of Philosophy* 80,

³¹ たとえば Dawkins の「延長された表現型」が理論というより一つの見方を提供するものであるのと同じように(cf. Dawkins 1982, ch.1)。

³² Papineau(2001)に対しては Braddon-Mitchell & Jackson(2002)も効果的な反駁を加えている。

372-377.

- Buller, D. J., 1998, Etiological Theories of Function: A Geographical Survey, *Biology and Philosophy* 13, 505-527.
- Cummins, R., 1975, Functional Analysis, *Journal of Philosophy* 72, 741-765.
- Davidson, D., 1987, Knowing One's Own Mind, rep. in his *Subjective, Intersubjective, Objective*. Clarendon Press, 2001.
- Davies, P. S., 2001, *Norms of Nature*. MIT Press.
- Dawkins, R., 1982, *The Extended Phenotype*. Oxford University Press.
- Dennett, D., 1996, Cow-sharks, Magnets, and Swampman, *Mind & Language* 11, 76-77.
- deVries, W. A., 1996, Experience and the Swamp Creature, *Philosophical Studies* 82, 55-80.
- Dretske, F., 1996, Absent Qualia, *Mind & Language* 11, 78-85.
- Dretske, F., 2001, Norms, History and the Mental, in D. M. Walsh, ed., *Naturalism, Evolution and Mind*. Cambridge University Press.
- Fodor, J., 1994, *The Elm and the Expert*. MIT Press.
- Levine, J., 1996, SwampJoe: Mind or Simulation?, *Mind & Language* 11, 86-91.
- Ludwig, K., 1996, Duplicating Thoughts, *Mind & Language* 11, 92-102.
- 前田高弘, 1999, スワンプマンにさよならする, 『科学哲学』 32-1, 67-81.
- 前田高弘, 2001, スワンプマンに再会する, 『科学哲学』 34-1, 89-93.
- 前田高弘, 未刊, 現象的外在主義について.
- Matthen, M., 1997, Teleology and the Product Analogy, *Australasian Journal of Philosophy* 75, 21-37.
- Millikan, R. G., 1984, *Language, Thought, and Other Biological Categories*. MIT Press.
- Millikan, R. G., 1989, In Defense of Proper Functions, rep. in her *White Queen Psychology and Other Essays for Alice*. MIT Press, 1993.
- Millikan, R. G., 1993, Propensities, Exaptations, and the Brain, in her *White Queen Psychology and Other Essays for Alice*.
- Millikan, R. G., 1996, On Swampkinds, *Mind & Language* 11, 103-117.
- 水本正晴, 2000, スワンプマン擁護のために, 『科学哲学』 33-1, 87-90.
- 水本正晴, 未刊, スワンプマン論法と物理主義.
- Neander, K., 1991a, The Teleological Notion of 'Function', *Australasian Journal of Philosophy* 69, 454-468.
- Neander, K., 1991b, Functions as Selected Effects: the Conceptual Analyst's Defense, *Philosophy of Science* 58, 168-184.
- Neander, K., 1996, Swampman Meets Swampcow, *Mind & Language* 11, 118-129.
- Papineau, D., 1996, Doubtful Intuitions, *Mind & Language* 11, 130-132.
- Papineau, D., 2001, The Status of Teleosemantics, or How to Stop Worrying about Swampman, *Australasian Journal of Philosophy* 79, 279-289.
- Price, C., 2001, *Functions in Mind*. Clarendon Press.
- Sober, E., 1985, Panglossian Functionalism and the Philosophy of Mind, *Synthese* 64, 165-193.
- Wright, L., 1973, Functions, *The Philosophical Review* LXXX , 139-168.